

# 「花嫁のれん展」が実現し、

## そこから何が

## 生まれたのか？

「私もこのまちを何かしなければと思っていたところに、5人から花嫁のれんの提案を受けたんだよ」と話し出した北林町会長。

そのころ、北林町会長は歴史を感じる一本杉通りの町並みに、能登で初めて4軒の建物を「国登録 登録有形文化財」にと、申請に乗り出していた。

しかし、指定されても北林町会長は満足していなかった。次の課題が浮き彫りになったからだ。「登録有形文化財に指定されることになっても、それを活かしたまちづくりをどうしたらいいのか思案中だった。そこに花嫁のれんの話があったんや。あまりのタイミングの良さに、即動きださなければと思った」と、霧が立ち込めていた頭の中が鮮明になった当時の様子を話した。

### 生活文化の再認識による

### 「宝」「文化財」が生まれる

「花嫁のれん展の成功は、手を加えず、一本杉通りにある生活文化そのものを見せたから成功したんや。女性のクチコミの発信力で、人々が集まり、飾ってある花嫁のれんの前で、昔嫁いだ思い出話に花が咲く。まさにこの地域にある生活文化が女性の心を捉え、花嫁のれんが地域の「宝」「文化財」であることを証明してくれた」と話す。

### 住民の意識に変化が生まれる

「花嫁のれん展」が有名になり、全国からの観光客や視察に訪れる人たちが賑わいを見せるようになった一本杉通り。そういった状況から、商店を持たない住民も、まちづくりに対する意識が変わったとわかる出来事があった。

ある日、住民が北林町会長に話した。

「たくさんの人たちが来てくれるようになり、昔の一本杉通りのように活気づいてきた。次は、商店の人ばかりで考えるのではなく、住民全体で取り組

一本杉町会長

北林 昌之さん

むこともあるのでは。ごみ0宣言をしてみては」と北林町会長に切り出した。北林町会長は、住民のまちづくりに対する意識が変わってきていることを確信し、住民の意向をくみ取り実施した。平成16年9月に「ごみ0宣言」を実施し、平成17年1月には燃えるゴミの「ごみ軽量化」を行った。これは、商店の関係者だけで成しえるものではない。全ての住民の協力があつてこそ成しえるもの。「花嫁のれん展」を開催したひとつのきっかけから一本杉通りの住民は、連帯感を持ち始め、まちづくりに対する意識が変わつたのだ。

### 次に受け継ぐ人を どう育てるか

今年9回目を開催した「花嫁のれん展」。平成19年には名古屋展を開催。平成20年には東京展、平成23年には関西展を開催し、全国区となつた今、北林町会長はこう話す。「花嫁のれん展も軌道に乗ってきた。そして、向かい3軒、両隣の住民コミュニティの関係も築かれてきた。次は、次の世代に引き継ぐ若い人たちが育てなければならぬ。そして、故郷を離れ、都会に住む若者が七尾の話題を聞き、故郷を想い、七尾に帰りたいと思うようになってもらえれば・・・」と北林町会長が考えるまちづくりへの思いは尽きない。



花嫁道中 (4月29日(日))

### 今の世の中で成功する まちづくりとは

施設の建設や道路整備などを行うまちづくり。

そして、一本杉通りのように地域コミュニティを再生させるまちづくりがある。七尾市が目指すまちづくりの大半は、後者である。

まちづくりに対する一本杉通りの成功の秘訣は次のことではないだろうか。

- ① 危機感から生まれたアイデアを実行に移したこと
  - ② お金を当てにせず、あるものづかいを行ったこと
  - ③ 地域の生活文化を活かした取り組みを行ったこと など
- 誰もがわかつているようにも思えるが、実行に移すのはなかなか難しい。
- 地域力を向上させる主役はそこに住む人である。人が考え、行動し、評価する。まちづくりを成功させるには、そのような取り組みから生まれた住民コミュニケーション、つまり顔と顔を合わせて話す基本が必要なのでは。
- 地域を何とかしたいと思いがら、もがいている人は多い。今一度、皆さんも考えてみてはいかがでしょうか。